

夢みる野菜 能登といわき遠野の物語



細井勝

HOSOI Masaru

野菜 夢みる

能登といわき遠野の物語

論
創
社

地中海にまるでロングブーツのように飛び出しているイタリアと似た日本の半島に、長靴を逆さまにしたような形で日本海に突出している能登半島がある。

半島先端部の日本海側には険しい岩場が続いている。一部に切り立った崖がないではないが、磯に面した複雑な海岸線の多くはつづら折れの道路で結ばれている。そこここに小さな漁港の船だまりがあり、一年を通して強い潮風や季節風が突き刺さる半農半漁の集落がぐるりと半島の先端を取り巻くように点在している。

そうした能登の先端に珠洲市^{すず}がある。最新の国勢調査に基づく平成二七(二〇一五)年一〇月一日現在の速報人口は一万四六三一人、世帯は六三四八(二〇一六年二月末

の住民基本台帳による)を数える。国立社会保障・人口問題研究所の統計資料をもとにした集計によれば、このまちは全国の七九〇市の中でもっとも人口が少ない自治体の一つであり、平成二七(二〇一五)年一〇月の時点では、七八四位となっている。

この集計において珠洲市より人口が少なかった市は、高知県の土佐清水市、室戸市、北海道の赤平市、夕張市、三笠市、歌志内市しかなく、その後も変動がないとするなら、本州では一番人口が少ない市ということになる。

もとより、六五歳以上の老年人口が占める割合も、全国上位クラスにあり、このまちの人口の推移は展望するまでもなく、働き盛りの労働人口は次第に減少を続け、一次、二次、三次産業のどれ一つをとっても、明るい未来を見通すことは難しい。

石川県の県庁所在地である金沢市から車を走らせても、一路北上して珠洲市内へ着くのに三時間近くは要してしまふ。同じ金沢から北陸自動車道を南下すれば、京都へ着いてしまう所要時間とほとんど変わらない。

この閉塞感、あるいは、四囲を海にさえぎられ、ともすると、最果ての袋小路に閉じ込められて生きるやりきれない気分は、若い世代を都会に走らせてしまいがちだ。

このまちに原子力発電所の建設計画が浮上したのは昭和五〇(一九七五)年だった。将来への夢も展望もないのなら、珠洲市が誘致を表明し、通産省(現在の経済産業

省)が電力会社の営業区域を超えた広域の共同開発を促した。これに伴って翌年、関西、中部、北陸の三電力会社が構想を打ち出している。計画地になったのは高屋地区たかやと三崎町寺家地区じけ。いずれも美しい海と緑豊かな里山が広がる地域だが、賛否をめぐって住民は二分され、ほのぼのと睦みあっていた旧知のあいだにとげとげしい空気が流れた。市長選や石川県議会議員選挙、市議会議員選挙のたびに原発誘致、反原発は大きな争点と化し、珠洲市に暮らす人々の心もすさんだ。

この原発計画はやがて、平成一五(二〇〇三)年に三電力会社が「電力自由化の厳しい経営環境」を理由に計画凍結を申し入れたことで立ち消えとなり、同時に、誘致した原発を起爆剤に生き残りたいと模索した地元自治体の切なる夢もまた断ち切られた。

原発を核に据えた壮大な夢がついて十数年、いま、このまちに残ったのは、昔と変わらぬ自然と向き合う素朴な営みと、ゆったり流れる時間と言えはいいのだろうか。派手やかな都会の喧騒けんそうとは無縁の無垢な暮らし、変化に乏しい毎日が息苦しいのか、このまちで育った若者の多くは高校を卒業すると、都市部の金沢や東京、大阪、名古屋といった大都会へ流出することが当たり前のようになり、こうした傾向はいまなお変わっていない。

しかし、同世代の若者たちが背を向けて遠ざかろうとするこの珠洲市に、小さな農業生産法人を立ち上げ、従来の慣行農法とは異なる無化学・無農薬という生産方法で野菜を栽培し、ブランド化を目指そうと動き出した若い群像がいる。彼らが目指すのは、手間暇のかかる無化学・無農薬農業を可能な限り大規模に展開し、能登半島の奥能登と呼ばれる先端エリアを付加価値の高い野菜の供給地に育てあげることであるという。

あえて、古里の半島の突端に踏みとどまって土にまみれ、汗みどろになって大地と格闘を続ける彼らの人生観、夢のモチベーションはどこにあるのだろうか。

このまちは半島によって、都会から隔絶されている。流行の最先端と呼べるものと何もない。

むしろ、時代の流れから取り残されるがまま、静かに歳月を刻んだ田舎なのだが、だからこそ、周囲に豊かな自然が残り、古くからの生活文化、厚い信仰心に根差した優しい精神文化が凝縮して息づくところに都会にはない魅力を感じてしまう。

日本中に東京を模倣したような金太郎アメさながらの二流、三流の都会がひしめくなか、大きな半島の行き止まりであるがゆえ、まるで「ゆりかご」のように人の営みを静かに包み込んできた珠洲市はまさしく日本の原風景が残る「一流の田舎」である

と言っている。

そうした土地で、何一つコントロールできない自然を相手に、飄々と個々の将来の夢をつかみ取ろうとする若者たちの徒手空拳は、いつか輝かしい展望を開いていくのか、それとも無謀についでしてしまうのか。だが、「社会的な地位や名誉などとは無縁の存在であっていつこうにかまわれない」と言い切る彼らの表情は穏やかだ。

二次、三次産業がふるわないのなら、むしろ、農業という一次産業の新しい地域の担い手を目指したい。そう心に刻んで愛すべき古里の大地に踏みとどまり、黙々と生きていこうとする彼らの一徹な仕事ぶりは、まぶしい光に満ちている。

彼らが「夢みる野菜」とはいかなるものなのか、「筋金入りの田舎」で練り広げられる大地への挑戦は何を芽吹かせていくのか……。彼らの野菜にぞっこんほれ込んで斬新な食品加工に乗り出した、やはり古里の再生に気骨を見せる福島県いわき市遠野の農業生産法人の息づかいにも迫りながら、夢を追う群像の果敢な姿に密着した。

004 はじめに

第一章

海の底から広がった農業の夢

019

- 020 海があえいでいる
- 024 「もしも」の奇跡を期待させた野菜
- 026 社屋も倉庫も金もない
- 028 風当たりの強いしがらみの土地
- 031 甲子園を夢見た高校球児
- 033 人を感動させる仕事に就きたい

- 035 プロのダイバーから足を洗う
- 037 国連機関の調査がもたらした道
- 039 「こだわりの農業を貫け」
- 041 「誰も立ち上がらないなら自分が立て」
- 043 大義は地域持続の農業ビジネス
- 045 独立していく人材の育成を志す

第二章

無化学・無農薬農業への挑戦

047

- 048 培養した土着菌が強い味方に
- 051 硝酸態窒素を抑えるこだわり
- 055 日本海と富山湾を見下ろす畑
- 057 科学で化学を抑え込む
- 058 農作業をデータバンク化する
- 059 大赤字を出した一年目の失敗

- 061 新規就農者を供給する会社
064 運転資金の確保に別会社で活路
066 能登に生きるスーパードが生命線
069 「夢なんか見ても食ってはいけない」
072 誰でもできる土壌分析法を研究
074 無化学農法を標ぼうできない苛立ち
077 有機 J A S の認証を急がない思惑
078 評価される異能の農業経営センス

第二章

夢見る力が若者たちの生きる糧

081

- 082 夢とともに追える仲間たち
083 プロボクサーを目指した夢ついで
086 野菜に寄り添う覚悟で生きる
088 独立して考案した土壌の太陽熱消毒

- 091 潜水漁の稼ぎを投げ打ち農業へ
092 転身を決意させた能登半島地震
093 ベンچールはもはや人生の舞台
096 四人の子を抱え農業に走る
099 マニアルが通じないから頑張れる
101 オールマイティのマルチな女性
103 支配的と見られても仕方ない
104 誰でも使える栽培テキスト作りに知恵
106 足袋拔を手ほどぎした先輩ダイバー
107 真骨頂は原価意識の高さ
110 独立を条件に一年だけの社員に
112 農業は自然を相手に生きていける
114 会計事務所を辞めて一念発起
117 ほろ苦かった独立二年目
119 自分の畑に適した土壌を作ってみせる
121 プロバステに挑んだ青春に幕

第四章

夢の舞台は世界農業遺産

129

- 123 この珠洲にも夢追い人がいた
- 125 古里の祭りに不可欠な太鼓の名人
「僕が借金してすむのなら」
- 130 能登は夢のゆりかご
- 132 「SATOYAMA」はすでに世界語
- 135 輝きを失っていた能登の海
- 137 変化を促す導火線であればいい
- 138 男性的な外浦と女性的な内浦
- 141 夢追う心を育てた過酷な自然
- 142 世界的天文学者が見た明治の能登
- 144 日本海がもたらした寄り神伝承
- 145 凄まじいキリコ祭りの吸引力

- 148 一〇年で三五〇〇人ずつ人口が減る現実
- 151 能登に息づく農耕祭事「あえのこと」
- 153 能登の人の心には田の神様が実在する
- 155 限界集落はもう間近なのか
- 158 里山マイスターの若者五一人が能登に定住
- 160 ベシニールを見守る大学教授たち
- 162 臨場感にあふれた卒業論文
- 163 「泥をすすっても生きのびる」と誓った難聴青年
- 165 農業で癒すメンタルヘルス・プログラム

第五章

いわき遠野物語

169

- 171 ベシニールといわき遠野を結びつけた人
- 173 理科室はおときの部屋だった
- 175 大学一年で早くも起業

- 177 免疫学の世界的権威との出会い
- 179 「科学の目と詩人の心を忘れるな」
- 181 化学は遠くに置き、科学と知恵を重視する
- 184 古里が生き残るエンジンでありたい
- 187 無化学・無農薬野菜で活路を拓こう
- 188 退路を断つての新たな船出
- 190 暗転をもたらした東日本大震災
- 192 起死回生の決め手は「魔法の野菜スープ」
- 195 「馬鹿がいないと地域は救えない」
- 196 いわき遠野が醸し出す深い精神世界
- 199 遠野への愛情をよすがに生きる古老
- 201 「人は働くことよって道が開けてくるんだ」
- 202 「人に喜びを与えねば世の中、回らねえ」
- 205 零細農家にかげがえのない食品加工拠点
- 208 魔法のスープの豊富な野菜成分に自信
- 210 八万バツクの受注で滑り出す

- 212 被災地ゆえに備蓄食の開発にも汗
- 214 ベジュールで研修する青年社員の誓い
- 217 「生涯忘れない」足袋抜たちとの日々
- 219 遠野の未来を照らす「満月祭」


第六章

広がる連携と共感の輪

- 222 ベジュール野菜を見つけたバイヤーの驚き
- 225 「三流の都会より一流の田舎」で勝負
- 227 奥能登の浮上に「役買」たい
- 229 耕作放棄地で飛んでる野菜を作るロマンがいい
- 231 不思議と欲がない能登の人々
- 233 「いい目をして、いい顔色をして生きている」
- 236 種苗会社も共感の輪の中へ
- 238 能登半島の先っぽでイタリア野菜を栽培する

- 241 最高峰に挑む何も知らない奇妙な奴ら
- 243 何百通りも品種改良する種苗業界
- 244 海外青年協力隊を経て抱く夢
- 246 食文化研究家が感銘を受けた男気
- 249 「らぱんの野菜スープは命の素」
- 251 備蓄食開発に現われた青年実業家
- 254 温めずに食べるアレルギーフリーのカレー
- 256 「日本の人口の1割の備蓄食をカバーする」
- 258 備蓄食を貧しい国々にも届けたい
- 261 「あの野菜スープはきつと世の中に浸透する」

第
一
章



海の底から広がった
農業の夢

海があえいでいる

一徹な夢は能登の海の底から広がった。

夢の主役は足袋拔豪たびなきこという名のプロのスキューバダイバーである。珠洲市生まれの足袋拔は、一〇年ほど前から仕事で能登半島の海に潜る機会が増え、何度も潜っているうちに、ひどく違和感を抱くようになった。

「能登の海はやせ細っている。昔はこんなではなかったのに、なぜなのだろうか」

足袋拔によれば、暖流である対馬海流が日本海の沿岸に沿って北上するため、日本海に突き出した能登半島、とりわけ半島北岸の沿海は魚介類が豊富な母なる海といつてよい。昔から多彩な海藻類が繁茂し、そこへ小魚が集まり、小魚を捕食する大型魚類の姿も多かった。ところが、足袋拔が目にした海岸線間近な海の中は海藻がまばらで泳いでいる魚類も少なかった。

「大げさに言えば、やっと息をしている海といった感じでしょうか。以前は緑色や赤褐色のさまざまな海藻が茂って躍動する生命観を感じたのに、近年の能登の海には命が躍るような力強さが乏しく、どこへ潜ってみても、海があえいでいるように思えてなりませんでした」

疑問を抱いた足袋拔の思案は次第に深くなっていく。その過程で思い至ったのが半島の暮らしの形に起因するのではないかということだった。

暮らしの形に起因するとは、どういうことなのか。半島突端の珠洲市を中心とする奥能登地域の海岸線には、いくつもの小さな集落が少しの間隔をおいて連続的に点在している。ゆえに、総人口が少ない自治体とはいえ、広い範囲にわたって人の営みが見られないエリアはない。海岸部であれ、山間部であれ、どの集落にも、住む人は少なくても住民が暮らし続けており、海岸集落の周辺にしろ、丘陵地帯の集落周辺ししろ、小さな畑が無数に散らばって存在している。

足袋拔が思い至ったのは、そうした集落からの生活雑排水が多少は影響していることに加えて、珠洲市内の一円で耕されている畑で長いあいだ使用され続けてきた化学農薬が雨水などに溶けて海へ流れ込んでいくのに違いないということだった。

広い平野であれば、化学農薬は時間をかけて、それぞれの場所で濃度が薄くなり、



足袋拔 豪

川の流れを介して海に注ぐとしても、環境に与えるダメージはそう大きくない。

これに対して、なだらかに起伏した丘陵が広がる珠洲市では、平野のように農業が同じ場所にとどまることは少なく、雨水に溶け込んで短時間のうちに流出してしまう。しかも、丘陵の稜線から同時に日本海と富山湾が見渡せるほど、海までの距離がないこの土地では、どちらに雨水が流れるにせよ、農業は自然に希釈されることもなく、海へ流れ込んでしまう。

海が好きでたまらない。わけても古里の海を愛するがゆえ、その海を再生させる手立てを考えあぐねた末、足袋拔が選んだのは、自分自身が農家に転じて、海はもとより、あらゆる自然環境に優しい農業を実践する道だったのである。

ならば自分は何をなすべきかを考え、果敢な行動に打って出たところは、宮城県の気仙沼市で代々カキやホタテの養殖漁業を行ない、やはり海の栄養がやせ細っていることに気づいて、気仙沼湾に注ぐ大川の上流山間地で大規模な植林事業を手掛けた畠山重篤しげあつ氏と似ている。

畠山氏は著書『森は海の恋人』（北斗出版・文春文庫）などで広く知られ、平成二四（二〇一二）年には国連のフォレスト・ヒーローズ（森の英雄）に選ばれたほか、同じ年には第四六回吉川英治文化賞を受賞するなど、自然を大きな視点で見据え、豊

かな自然環境を保全し、守り育てる言動で高く評価されている人だ。

暮らしの糧を授けてくれる海行く末を思い、陸に上がって果敢に動いた畠山氏のような先哲が同じ日本の東北に実在していることを足袋拔は知っていた。やはり自分にとってかけがえない海に行く末を案じて、農業という未知の世界に突き動かされていく姿は、彼我の有名、無名を超えて畠山氏に通じる大きな覚悟を秘めた一途さを物語っている。

こんな経緯の後に立ち上げられた農業生産法人はベジュール合同会社と命名された。足袋拔は代表に就いている。水中カメラマンとしても活躍した時期が長く、撮影した画像データを要領よくパソコンに取り込み、パワーポイントに映し出すなど、IT技術の扱いにも熟達しているだけに、足袋拔は「自分の持てる能力をフルに動員して、自分たちの存在、安全な野菜を全国区にしたい」と考えている。そこには、「自給自足で安全な野菜を育てたい」という、こじんまりした発想などはない。

目指すのは、あくまでも無化学・無農薬の野菜栽培に特化した農業生産法人であり、いまは夢の入口に立っている。夢とは、無化学・無農薬農業を生まれ故郷に根付かせて、化学農薬を使った慣行農法とは対極にある生産方法のメッカにすることである。目下は「能登に足を運ばなければ口にできない極上の野菜をブランド化し、奥能登の

農業の姿を変える一石を投じたい」という夢の途中にある。

筆者がベジュールの野菜と巡り合ったのは、平成二五（二〇一三）年の春だった。人づてに、彼らが育てた野菜の安全性と自然の旨みの豊かさを聞きつけ、ある日、段ボールひと箱分の野菜を取り寄せてみた。

「もしも」の奇跡を期待させた野菜

届いた箱の中には、ニンジン、ダイコン、カブ、コマツ菜などが入っていた。およそ四〇センチ四方、深さ三〇センチほどの箱一個の詰め合わせで値段は七千円ほど。スーパーで買い求める野菜の値段を思えば、数倍も高かったが、すぐに箱を開けて食べたニンジンやダイコンのスライスの甘み、シャリッとした噛みごたえは、野菜の素人である自分にして「こんな食べたことない」と驚くほど強烈な印象だった。

当時、筆者の妻は癌を患っていた。試食の場には彼女もいたが、一口食べた反応は全く同じだった。もともと小食なたちで、そのうえ抗癌剤の副作用で食欲も落ちていただけに、「この野菜なら一口でも多く食べられそう」と喜ぶ言葉を聞いたことが嬉しかった。

以来、彼女は少しずつ、自分のためと家族のためにベジュールの野菜を料理に使い、知人から教わったレシピに従って調理した野菜スープも飲むようになっていく。一、二カ月すると体調がわずかずつ上向いた様子で、持ち前の明るい表情も取り戻してくれた。

何よりも驚いたのは、定期的に通院して抗癌剤の投与を受ける際の血液検査で、腫瘍マーカー（腫瘍が作り出す物質で、腫瘍の有無や症状の進み具合の目印となるもの。血液中あるいは尿中の濃度を測定し、一般に数値が高いほど腫瘍は重いと診断される）の数値が下がり始めたことだった。

この時点でもなお、「数値の好転はきつとあの野菜のおかげ」などと彼女は言わず、自分の体の変化には慎重だった。ところが、夏から秋口にかけて継続して野菜を取り寄せ、食しているあいだも、腫瘍マーカーは緩やかに下降を続け、一〇月には二人で旅行に出かけられるほど、体力も持続できていた。

だが、野菜を初めて食べた時期がすでに末期のころだったから、起死回生と思えた健康野菜の食事療法にも限界があったのだろう。妻の症状は初冬になって急変し、平成二六（二〇一四）年の年明けに息を引き取った。

残念なことに「もしかして」「よもや」と胸に去来していた奇跡が起きることはな

かった。それでも、ほんの一時期とはいえ、本人と家族に希望を抱かせてくれた野菜の存在が忘れられない。やがて、「あの野菜を育てているのは、どんな人たちなのだろう」とする思いが募り、傷心もいくぶん癒えた同年八月に珠洲市をおとずれ、足袋拔や土にまみれた仲間たちの姿を目にした途端、取材してみようと決めていた。

彼らの畑は珠洲市内のいたるところに点在していた。富山湾に面した砂浜に近い一角、住宅地のあいだの、うなぎの寝床のような細長い土地、山裾の農家から借り受けた数棟のビニールハウス、くねくねと曲がりながら丘陵の頂上に至る林道わき、日本海を見下ろす灌木の林の中に切り開かれた小さな畑……。いずれも面積は小さく、案内された畑の一つひとつを見ている限り、これが「若者たちの夢を叶える希望にあふれた場所」などとはどうしても思えなかった。

社屋も倉庫も金もない

資本金もわずかで、社員も一〇人に満たない貧弱な会社であるためか、本社と呼べる場所も収穫した野菜を集荷して発送する自前の倉庫もない。

彼らは、この決して良好とは言えそうにない仕事環境に身を置きながら、ひたすら

土壌の改良、効果のある無化学肥料の工夫、化学物質を完全に排した手作りの農業の試験を繰り返している。

小さな畑は平成二七（二〇一五）年の秋現在、珠洲市内に十カ所を数え、これらを合わせた耕作面積は約七畝におよんでいる。足袋拔によれば、耕作地はすべて珠洲市や市の仲介で借り受けた土地だという。彼らは、山間地、海岸部など、それぞれの土地で繁殖している菌塊を採取培養して、肥料に混ぜ込んでいる。畑一つひとつの特性、その土地固有のアイデンティティを重視して、時間と手間を惜しまない作業は際限がない。

足袋抜たちの畑の一つひとつが小さく、市内一円に点在しているにはわけがある。珠洲には広い土地がほとんどなく、中心市街地を取り囲むように広がるなげなしの平地はほとんどが水田として使われている。このため、野菜の栽培は平地に残ったわずかな土地と、丘陵地、丘陵の狭い谷筋を分け入った場所などで細々と続けられ、機械化による大規模農業が普及する余地はない。

こうした土地の多くは自家栽培の畑として使われているケースが多いとみられるが、急速に住民の高齢化が進んだ結果、隣の歯が欠けるように廃業してしまう農家が増え、次第に荒れ放題となっていく畑がここ近年、目についてきた。

足袋拔たちが借り受けるのは、主にこうした棄農地である。しかし農地として登録された土地である以上、持ち主は耕作を放棄したとはいえ草刈りをしないわけにはいかない。そうした手間暇が省けるだけでも、年老いて引退した農家には願ってもないことらしい。このため、賃料を要求しない地主もいて、資金不足にあえぐ彼らも助かっている。

風当たりの強いしがらみの土地

とはいえ、農家といえど長年、農協の傘下であって、いまもJAの下で営農指導を受ける人たちが大勢いる土地で、古くからのしがらみの外に立ち、JA主導の農業に背を向けようとする若者たちへの風当たりはややもすると強くなる。案の定、若者たちの理想には内心、共感を寄せていても、表だって協力を申し出してくれる農家、農業関係者は数少ない。

だからといって、足袋抜の心がささくれだつことはない。容易に手が届く目標ではなく、追いつがろうとしても届かない夢を追うからこそ、心を無にして走り続けられる。足袋抜は走り続けることが苦にならない。むしろ、黙々と努力を続けていられる自分の芯の強さを自覚することにより、モチベーションは高まり、ますます夢を追い続けていける。

無化学・無農薬農業が難しければ、経験を積んで勉強を重ねていけばそれでいい。強いしがらみに包囲され、地元珠洲市での身動きがままならないのなら、遠くの場合で支援者や応援団を増やしていけばいいじゃないか――。

足袋抜の思考はいつも軽やかで、恨みがましい言葉を発することもない。絶えず、包み込むような微笑みを浮かべて人と接しているからなのか、思いつめた求道者のような暗いオーラに触れることもない。

この心の強さはどこからくるのだろうか。足袋抜はいま三七歳。その人物像に迫って強く感じたのは、自分をいじめ抜いてなお飄々と前を向くアスリートの潔さであった。

足袋抜は昭和五三（一九七八）年五月一九日、石川県珠洲市熊谷町くまなたんのサラリーマン家庭に長男として生まれた。育ったのは珠洲市内の中心市街地にほど近い平野部の集落で、父は北陸電力に勤め、農家ではないものの、自家消費のための畑と水田があった。

小学校一年生のころに野球を始め、すぐに夢中になった。生まれて初めて抱いた夢

は、プロ野球選手になること。幼いながらに努力をいとわない野球少年だったというから、夢は見るものじゃない、叶えるものと考える素養はこのころからすでにあったのだろう。

当時、珠洲市内に七つあった少年野球チームの一つに入団すると、マウンドで独り相手打線と向き合うピッチャーでずっといたかった。中学卒業までピッチャーで通したが、海が近いのに、肩を冷やさないうように心掛けたため、海に入ることとはほとんどなく、二〇歳まで泳げなかった。

中学を卒業して進学したのは金沢市立工業高校の機械科だった。この高校は公立高校ながら、甲子園に出たこともある地元では名門の野球部があった。同高のスポーツ強化のため能登方面に相撲部、野球部、バスケットボール部の選手のスカウトにおとずれていた珠洲出身の濱野文雄相撲部監督（現在は東洋大学相撲部監督）が、獲得選手リストに名前のあった足袋拔の自宅をおとずれ、両親を説得してくれなかったら、親元から遠く離れた高校の野球部に入部することはなかっただろう。

甲子園を夢見た高校球児

野球部の寮には、能登の珠洲市や輪島市の中学から入部した選手六人がいた。慣れない共同生活ではあったが、足袋拔は中学までとはまるでレベルの違う野球漬けの毎日に酔いしれた。高校ではショートを守った。チームには速い球を投げる投手、緩急に優れた技巧派の投手がすでにいて、少年のころから自分の居場所として独り占めしてきたマウンドに立つことは叶わなかったが、無心に仲間と白球を追い、甲子園出場の夢に向けて汗と涙を流した日々は、やがて足袋拔の生きる原点の一つになっていく。

二年生夏の石川県大会では、準々決勝にコマを進めた。対戦相手はすでに全国区の強豪として知られ、巨人軍の不動の四番から大リーガーになった松井秀喜の母校、星稜高校だった。試合はもつれたが、最後に力尽きた。この年、星稜は甲子園で勝ち進み準優勝している。当時の星稜のエース、山本省吾投手はその後、慶応大学からプロ野球へと進み、オリックスなどで活躍した。

野球漬けの毎日は高校三年の夏で終わり、足袋拔は翌年の春、推薦で金沢市内の私立北陸大学へ進んだ。北陸では唯一、薬学部のある私立大学として知られるが、アイスホッケー部や野球部の後押しに熱心な大学だった。外国語学部中国語科に入学した

足袋拔は野球部に入って再び白球を追うことになる。

だが、入学して初めて迎える北陸大学野球秋季リーグの開幕が目前に迫ったころ、一学年上の先輩部員がノック練習の直後、突然心臓マヒで昏倒し、そのまま亡くなってしまふ出来事が足袋拔を変えた。

「その先輩は兵庫県の出身で、あの阪神大震災で被災しながら、危うく難を逃れて生きのびた人でした。倒れる直前まで、いつもと変わらず、さっそうとグラウンドに立っていたのに、一瞬で命を失った衝撃で、僕は考え込んでしまったんです。このまま好きな野球を楽しむためだけに大学に通っていていいのだろうか。プロになれるはずもないのに白球を追ひ、外国語学部を卒業してどんな仕事に就くのか一度として考えたこともない自分はいったい何者なのか」

野球をしたいだけ、その一念で推薦入学した大学は確かに居心地がよかった。だが、先輩の死を境に「人生がこんなにはかないものなら、生きているあいだにしておくべきことが他にあるはず」と思い詰めるようになっていく。足袋拔は初めて夢見心地の日常から目覚めて己の行く末を考え始め、人生の目標には掲げられなくなった野球漬けの生活から足を洗うことを決心する。

それまでの足袋拔は「勝負がすべて」という価値観だけにとらわれた野球選手だった。だからこそ、改めて「勝ち負け」という一言ではくれない生き方を見つけない、世間に役立つ仕事に就いて有意義な生活を送りたいと考え、一年次が終わると大学を退学した。痛々しい覚悟を秘めた一九歳の人生の船出であった。

そんな折、ふと目にした雑誌にダイビングスクールの広告が載っていた。「泳げなくても始められる」とくつきり書いてある宣伝コピーに見入っているうち、「やっぱり僕の天分は体を動かすことなんだ。あえてスポーツ系の仕事を避ける必要はない」と気がついた。

人を感動させる仕事に就きたい

普通のジムのトレーナーをしても客を楽しませるのは難しい。しかし、足袋拔は喜ばせることを超越して感動させられる仕事にこそ、やりがいを見出せると考え、親密な人間関係が不可欠で、信頼という絆で仕事ができるスキューバダイビングの世界に飛び込んだ。

足袋拔が門を叩いたのは、金沢市内の中心部にあったダイビングショップ、アミューズマリクラブだった。当面の目標はインストラクターの資格を得ることだっ

だが、店を経営する森山知明社長の話を聞いていくうち、「真面目にやればプロの道もそんなに高いハードルではない」と直感した。大学で外国語をかじった直後であったせいも、インストラクターになったあと、外国のリゾート地へ渡って指導経験を積む淡い夢も膨らんだ。

ところが、ダイバーの仕事にはリゾート型と都市型の二種類あって、リゾート型は短期間のレジャーで海をおとずれる人たちの一過性のサポートをするだけで、人間関係が深まるほどの付き合いにはなりにくい。これに対して、ダイビング専用プールを備えた店舗でイロハから潜水技術を教え込む都市型のインストラクターの仕事は、手取り足取り指導した客と一生の付き合いが続くことがあることを知り、そのままアマミューズマリクラブに腰を据え勉強を始めた。

それから一年後、足袋抜は見事にインストラクターの資格を手にした。当時、金沢市にあった店は数年後、隣接する野々市市に移ったが、幸い、この店は全国でも指折りの優秀な店で、社長自身がインストラクターをトレーニングできるトップクラスの資格を有していた。足袋抜はインストラクターの資格を得てからも、この人の下でハイレベルの訓練を受け続け、インストラクターの最高位になるまで実力を磨き上げた。アマミューズマリクラブに所属するプロのインストラクターとしておよそ一〇年を

過ごしたあいだ、足袋抜は日本海側では屈指の潜水スポットとして知られる福井県の越前海岸を中心に潜った。女性客の多いショップだったが、女の子にはもてず、年配の男性客たちにかわいがられた。

プロのダイバーから足を洗う

ひたすら潜ることに夢中で、お洒落には無関心、もともとシャイでもあったから、若い女性客と軽妙な話をするのも苦手だったことが、おじさん受けするダイバーにしまったのだろうか。年配の常連客たちからは「君と潜ると安心感がある」とよく言われた。命の危険を伴う海中で、客に「大丈夫」と言うからには、どうして大丈夫なのかを伝えなければならぬ。

ダイビングショップの社長から学んだのは、自分に命を預けてくれる顧客に、的確に安全の根拠を伝える情報伝達力だった。心の内に不安や怯えを抱えた顧客のストレスを逃がしながら、楽しませ、安全を確保するインストラクターの技術やマーケティング、経営マネジメントの基本も叩き込まれた。

一〇年が過ぎ去るのは速かった。愚直にダイビングの仕事と向き合い、客とのコ

コミュニケーションの一つにと始めた水中写真の腕前を上げ、プロの写真家としても高い評価を受けるようになっていた足袋拔は再び前途に悩みを抱き始めていく。

「リーマンショックの影響で、それまで安定していたダイビング業界の市場が縮小に転じたところだったでしょうか。当時の会社の業績は決して悪くはなかったのですが、命を託した絆があるとはいえ、サービス業に身を置くうち、商業的な感覚に僕自身がならされ、違和感を覚えるようになったのです。社会との関係もレジャーの補完ビジネスに過ぎないと思うようになり、いつの間にか、もっとほかにすべきことが自分にはあるはずだと考え込むようになっていったのです」

三十一歳になった年に転機はおとずれた。国連大学が日本に置いた初の学術拠点、国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニットのあん・まくどなると所長（カナダ人女性）との出会いであり、これを機に、足袋拔の人生観や世界観は一気に広がった。

そのころの石川県は里山里海やCOP10（二〇一〇年に名古屋市で開催された生物多様性条約締約国会議の第一〇回会議）の事業に関するビジュアル資料が不足していた、能登半島を世界農業遺産に認定してもらおう取り組みの弱点にもなっていた。

国連機関の調査がもたらした道

まくどなると氏は初めて会った足袋拔が撮りためていた海中の写真や映像に高い関心を寄せ、あるとき、資料提供という形で協働できないかと持ちかけてくれた。まくどなると氏は日本の海や海女を海外に発信したいとも言い、足袋拔の写真は次第に国連機関の報告書や啓発活動に重要な役割を帯びるようになっていく。

思いがけなく関わった国連の調査、その延長線上に見えてきた能登の世界農業遺産認定は足袋拔の心を次第に揺り動かしていく。「自然や文化を伝える仕事は胸を張っていい堂々たる仕事かもしれない」。こうした思いが背中を押すようになると、心も再び古里に回帰したのだろう。足袋拔はダイビングショップを辞して能登に戻る決心を固めると、平成二一（二〇〇九）年、珠洲の実家に舞い戻った。

帰郷した当初の仕事は、能登や日本の環境を紹介するドキュメンタリーを作るため、COP10の研究者に海の写真や映像を提供することだった。帰郷した直後、足袋拔は自分が撮りためた膨大な画像や動画データを管理するほか、新たに舞い込む撮影依頼の仕事マネジメントする「マザーネイチャー」と呼ぶ株式会社を立ち上げた。

ところが起業した途端、小さいころから世話になってきた珠洲市役所の職員から

「海の写真ばかり撮って遊んどるんじゃない。ちゃんとした仕事に就かんかい」と言われ、珠洲市産業振興課の臨時職員採用書類にサインさせられた。結局、足袋拔は半年間にわたり、産業振興課長のもとで地元伝統の珠洲焼のCMやホームページの管理、カレンダー制作など広範な業務に就き、高校を出たあと長く留守にしていた古里を見つめなおすきっかけと時間を得た。

それだけでなく、その課長はいまの仕事に打ち込みきっかけも作ってくれた。足袋拔によれば、課長が「地域のまちづくりに詳しい金沢大学の水野雅男教授（現在は法政大教授）を紹介してやる。先生の下で勉強させてもらえ」と言い、半年間、教授が指導するゼミで能登のまちづくりプランやビジネスモデル作りを経験するチャンスに恵まれた。

指導を受けていたあるとき、教授は「地域における社会的価値をいかにして生んでいくか」と話し、一つの例として、農業のソーシャルビジネスモデルを生み出し、地域の先駆けとなっていく発想を口にした。

「こだわりの農業を貫け」

足袋拔が関心を抱いたと感じたのか、水野教授は「面白い実験的な農業をやっている人がいるから紹介する」と言い、一人の人物に会わせてくれた。

この人こそ、「農業をやるんだったら徹底したこだわりの持って、初めから尖がった農業をしない。珠洲という市場から遠い距離的なハンディを抱えた場所で普通にやっていたは無意味だよ」とアドバイスし、のちにあらゆる教えを乞うことになる無化学・無農薬農業の恩師にほかならなかった。

その時点で、足袋拔が農業の現場に身を置く自分の姿を強くイメージしていたかといえ、うそになる。

当時の足袋拔にはむしろ、別の方面に大きな気がかりがあった。

「それは自分の目で確かめた珠洲の海の変化でした」

実際、能登の海に潜っていると、なるほど水は青くきれいだ。しかし足袋拔は撮影や潜水調査で潜るたび、「生物多様性の面では能登の海は間違いなく疲弊している」と感じ取っていた。福井の海も能登の海も、魚種はそう変わらないが、福井に比べて能登は魚の数が少なく、魚群もあまり見られない。地元の漁師の「漁獲量が昔に

比べて減っている」という話もうなずける。海岸から二、三〇〇メートル離れた海中においても、透明度は楽しめるものの、生命力がみなぎるといふ実感は乏しかった。海藻についても然りで、魚が産卵して稚魚が安心して育っていける場所が減っていることは確かだった。

「能登の里山里海が世界農業遺産に認定されそうと騒がれている割には、海は脆弱だ」

そう感じた足袋抜の胸の内に漂っていたのは、無力感であったのだろう。自ら世界農業遺産認定の流れの一端に関わり、「俺は社会と直結した大きな仕事をしている」などという自惚を秘める一方で、「なぜ古里の海に元気がないのか」と考え込む日々が続いた。やがて、「能登の地形による化学物質の海への流出が原因の一つではないのか」と自分なりの答えをはじき出し、「ならばどうする」「誰かが動いてくれるのか」と思案した帰結こそ、農業に転じる道だった。

信頼を集め、確かな技量をもつスキューバダイビングのインストラクターとして活躍した足袋抜がいまも、同じ仕事に就いていたならば、ますます海に潜るスキルは向上していただろう。あるいは独立して、自分のショップを構える一国一城の主になって、稼ぎもうなぎ上りであったかもしれない。

そんな足袋抜が積み重ねたキャリアも、未来の財産もかなぐり捨てて「未練はない」と言い切るのは、古里を離れ、古里を忘れて自分の将来のためだけに暮らした一五年の歲月への悔いが大きいからだろう。自分が背を向けているあいだに、能登は高齢化で働き手が少なくなり、若い人も減ってしまった。徐々に海自然环境が劣化していくというのに、対策に立ち上がろうとする人たちも見当たらない。

「誰も立ち上がらないなら自分が立て」

足袋抜はこんなに疲弊した古里を置き去りにしようとした自分を戒め、こう考えた。「誰かが立ち上がらない限り、健康な自然環境を守りながら誰もが穏やかに暮らしていける古里の再生はありえない。誰もいないのなら、自分が礎となって、海環境に優しい新しい農業の形を実践してみよう。食べていける農業でなければ若者が魅力を感じないし持続性も生まれない。付加価値の高い農業を根付かせることを使命だと思いついて生きていこう」

もとより学者でも環境科学の専門家でもない。そんな自分にできることとは、実践家に徹して地域に一石を投じることしかない。こうして海を背にして大地に踏ん張る

足袋抜の新しい人生はスタートした。

足袋抜は、ともすると閉鎖的で、新しいものを受け入れようとしめない能登の土地柄が嫌いだった。しかし、自分が生まれ、育ててもらった土地に戻って来たからには、古くからある、縦横にからみあう人のしがらみも受け入れて自然体で生きていこうと腹をくくっている。

腰を据えて今後の仕事を思案した足袋抜は「農業をやるなら、尖った農業をやれ」と助言されていたことを反芻しながら、一つの決断を下した。それが究極の理想の農業を実践してみせる農業生産法人の設立だった。

平成二三（二〇一一）年二月、足袋抜が同じ志を抱く友人とともに設立した農業生産法人は「ベジュール合同会社」である。「ベジ」はベジタブル（野菜）の「ベジ」、「ジュール」とは熱量を測る単位も意味していて、熱い気持ちで野菜を栽培する会社をフランス語風の語感でアピールすることを狙った社名であった。

目指すのは、無化学・無農薬農業で野菜を量産し、付加価値の高い野菜を安定的に市場に送ることであり、少し値段が高くても野菜が売れて採算が立つことを証明してみせることに尽きた。

素人がいきなり参入して暮らしていけるほど農業は甘くない。まして、化学農薬に頼らない農法では収量にばらつきがあり、計画栽培が難しい。化学農薬を使わない結果、収穫した野菜は形も大きさも不揃いになりやすく、規格品の野菜が並ぶ市場からはそっぽを向かれてしまうだろう。足袋抜もそれは承知していたが、甘くはないチャレンジだからこそ、まとまった広さの畑で実現してみせて初めて、食べていける農業を提案できると確信している。

もとより、資金力がなく、人手にも限りがあるベジュールが当面の目標を達成するまで、どれほどの時間を要するのかいまは分からない。

「無農薬栽培が広まっていけばいいのですが、お年寄りの農家が多い能登には変革なとものほか、という人たちもいます。こうした農家の心を変えられないうちは、絶対にごり押しはしません。それよりも、まずは自分たちがやってみせ、究極の理想の農業という価値観を周りの人に押し付けず、淡々と粘り強く畑に立ち続けるつもりです」

大義は地域持続の農業ビジネス

経験もなく、資金も持たずに誕生した農業生産法人の前途はおそらく険しいものに

なる。だが、ベジュールには、世界農業遺産に認定された土地で理想的に行われるべき農業の姿を明確にし、人と自然に優しく、地域の営みを持続させる農業のビジネスモデルを率先して模索するという大義もある。

世界農業遺産は、どちらかといえば観光産業を補完する世界自然遺産、世界文化遺産と混同されがちだ。しかし、実際には世界の農業の「貧困層支援」対策だと足袋拔は解釈している。フィリピンや南米アンデスなど、開発途上国での認定が先行したことは何よりその表れといっていいただろう。しからば先進国で初めて能登半島が認定されたのはなぜなのか。この疑問に対する足袋拔の言葉は明快だった。

「先進国日本と言ってみても、能登は仕事が少なく、一次産業の基幹である農業もパツとしていない現実に直面しています。その中でFAO（国際連合食糧農業機関）は先進国ならではの農業の新しい展開を期待しているのに違いありません。僕は従来と異なる形の農業を生み、新しいビジネスモデルを創出していくことを国連機関から宿題として与えられたのが、先進国日本の世界農業遺産だと考えています」

こうした見方が的を射ているならば、世界農業遺産に認定された地域は、保護、保全ではなく、勇気をもって変革に立ちあがるべきとするメッセージを受けたことになり、その本質こそが足袋拔たちの大義を支えていると言っていいただろう。

ベジュールの一〇年後の目標は、夢を共有する仲間たちを増やしていくことだ。平成二七年秋の時点でベジュールの従業員は七人に過ぎない。だが、この少ない人数とても、若者の定任率が低い現状を考慮すれば、見過ごすことのできない戦力といえる。足袋拔は近い将来の従業員数が二〇人から三〇人くらいの規模になればいいと見通している。さらに望んでいるのは、いつかベジュールの農業に共鳴して、同じ生産方法で野菜栽培に挑んでくれる既存の農家が一軒でも多く名乗りを上げてくれることであり、こうした協力農家も近い将来、五〇軒ほどに増えてくれればありがたい。同時に、ベジュールに入って、二年から三年ほど無化学・無農薬農業の研修を積んで栽培技術を覚え、その後は独立して自分で生計をたてていく従業員は、どんどん増えて欲しい。

独立していく人材の育成を志す

夢は滑り出しているが、背伸びはしていない。少しばかりの安定をよすがとしてきた地域の農業事情を肌で感じているだけに、足袋拔は慎重きわまりない。

その言葉もまた「大きな会社に育てるのが狙いではなく、究極の農業を地域に広め、

浸透させることこそがベジュールの当面のゴールです」と慎重だ。

なぜなら、独立したいという意欲を持つ者でなければ農業に本腰は入らないからであり、社員としてベジュールに迎え入れた従業員も、報酬で安穩に暮らしていければいいと考えるだけの頭数であってはならず、いずれは巣立っていくべき人材であってほしい。足袋抜にとつてのベジュールは、ずっと彼らを雇い続ける場所では決してなく、むしろ、本気で農業をやりたい人間を育てる場所であることがよく分かる。

まずはベジュールが成功体験を重ね、ノウハウのすべてを協力農家や独立した若い農家たちと分かち合い、やがて、奥能登一円に無化学・無農薬野菜の集散地が根を張っていく……。将来の奥能登が安全野菜の一大生産地となれば、労働の受け皿も広がり、若者の都会への流出にも歯止めがかかるだろう。足袋抜はいま、こうしたシナリオを旗印に掲げて夢の入口に立ち、古里能登の未来への礎になろうと走り出したところだ。

能登半島の先端のまち、石川県珠洲市と、福島県いわき市の中山間地である遠野が無化学・無農薬で栽培された野菜で強く結びつき、いずれも限界集落寸前という地方の片隅で、それぞれの夢を追い求める群像の息づかいを描いてきたが、成功した農業のビジネスモデルとして取り上げたわけでは決してない。

むしろ、まだ成功を手にしていないからこそ漂う彼らの悲壮感、不安と希望が相半ばする紆余曲折の日常を現在進行形の臨場感とともに切り取ることで、夢を掲げて生きる者たちの強さを描きたいというのが執筆の意図だった。

どんな土地にも、諦念とあらがう気骨を秘めてひっそりと生きる人たち、かすかな

希望をよすがに歯を食いしばる強い人たちがいる。

そこには古くからのしがらみもあり、何かを成し遂げようにも、つい妨げとなるその土地固有の固定観念が重苦しくたちはだかつてくる。

本書に登場する農業生産法人ベジュールの若者たちもまた、身近に理解者こそ多くないものの、次々にその凜とした姿に感銘を受ける協力者や支援者たちが目の前に現れ、飄々と自分たちの道を切り拓いていく力強さが夢を叶えるプロセスの中で培われていくことを体現している。

取材を通して受けたのは、ベジュールを率いる足袋拔豪と仲間たちこそ、無化学・無農薬で栽培される野菜のように純粹、無垢であり、彼ら自身が「夢みる野菜」にはかならないという印象だった。

これは、福島県いわき市の農業生産法人、いわき遠野らばんにも共通していて、遠野の親方を自他ともに認める平子を中心とする群像は、紛れもなく「いわき遠野物語」の主役たちである。岩手県の遠野とおなじ「とおの」という郷愁に満ちた響きを持つ土地で、彼らが宮沢賢治のロマンあふれる小説の登場人物とオーバーラップする強い生命力を秘めていることが痛快であり、鮮烈であった。

成功しなければ世に問えないと考えるのでなく、まだ成功を勝ち取っていないから

こそ醸し出される生身の人間力を取材する機会を得たことは幸運だった。

本書の執筆にあたり、成功した農業のビジネスモデルでなくていい、夢に向かって這い上がろうとする群像のドラマを自由に書いていただきたい、自分たちの矜持もそこにあると出版をご快諾いただいた論創社さんに深く敬意を示し、御礼を申し上げます。

本編の冒頭にも書いたことだが、ベジュールの野菜を食べて病気に打ち勝とうとした妻は、生前末期の一時期、「夢みる野菜」たちを信じて心ひそかに命のほむらを燃やしていたのに違いない。大切な人に生きる希望を与えてくれたベジュールの若者たちにも、改めて感謝の気持ちをお伝えしたい。

「夢みる野菜」の物語はまだほんの序章に過ぎない。取材への着手から刊行にいたるまで二年近くも費やすあいだに、主人公たちを取り巻く状況は刻々と変化しており、このあとがきを書いているさ中には熊本県で大地震が発生した。本書の最終章で取り上げたカレーの災害備蓄食は折しも生産を始めた矢先であり、なげなしの備蓄食を営業には回さず、すべて熊本の被災地に持ち込んで被災者たちに振る舞った関係者たちの熱い行動に頭が下がる思いだった。

ただ一つ残念だったのは、ベジュールの若者たちの生き方に共感を寄せ支援してい

た能登のスーパーチェーン、どんたくの社長、山口成俊氏が本書の刊行を目前にした今年三月末に急逝してしまわれたことだ。インタビューで語られた氏の言葉は、厳しい社会環境にある能登半島で歯を食いしばる矜持を主人公である若者たちに示した力強いメッセージであり、くじけずに頑張れと励ます慈愛に満ちたエールでもあったと思わずにいられない。

山口氏のご冥福をお祈りすると同時に、氏の熱い志が同社の後進の方々に受け継がれていくことを切に願いたい。

最後に取材、資料収集などにご尽力を賜った江村敬司君にも御礼を申し上げます。

平成二八年五月

細井勝

夢
み
る
野
菜

2016年6月10日初版第1刷印刷

2016年6月20日初版第1刷発行

能登といわき遠野の物語

著者
ほそいまさる
細井 勝

発行者
森下紀夫

発行所
論創社
東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル 101-0051
電話 03-3264-5254 ファックス 03-3264-5235
web. <http://www.ronso.co.jp/>
振替口座 00160-1-155266

印刷・製本……………中央精版印刷
ブックデザイン……………宗利淳一

落丁、乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN978-4-8460-1543-5 ©2016 Hosoi Masaru, printed in Japan

細井
勝
(ほそい・まさる)

1954年、金沢市生まれ。
20年にわたる新聞記者生活を経て独立後、
金沢を足場にノンフィクション取材を手がける。
主な著書に『加賀屋の流儀』『遭難者を救助せよ』（いずれもPHP研究所）
『稚拙なる者は去れ』（講談社）などがある。